

『人文論叢』の終刊に寄せて

大 國 義 一

昭和四十六年、本学に着任して最初に入ったのが人文学会であった。人文学会はどの学科にも所属しない人文関係の人の集まりであった。学会には『人文論叢』という刊行物があり、自由に発表できる機関誌であった。

当初は本学の一般教育科目を担当する教授、助教授、専任講師、助手など、本会の趣旨に賛同して入会を希望する本学関係者は誰でも入会できるという学科の閉鎖性を打破しようという試みも反映していた。昭和39年11月の総会で一般教育科目を担当する文言は専門課程に対する教養課程という意味でしかありえず、広く人文科学の分野の研鑽や業績を発表する機関誌を目指し人文学会と改めた。

学会の主な役割は機関誌の発行であった。創立20年の記念号に故中村茂夫氏は次のように述べておられる。「学問上の新しい発見や解釈が学界で承認される場合、その評価について大事なことは、誰が最初にそれを述べたかという**発表の優先性**であるから、研究に携わる者の切実な希望は、自分がまとめた新しい研究成果をできるだけ早く発表することである。専門学会誌の場合は広く専門の学者の眼にふれるという利点はあるが、掲載には二年以上もかかったり、投稿しても載らないことが多い。」そこで会員が機関誌をもち自由に発表できるのは有難いことであった。しかしこの機関誌は掲載論文の質を高めることが大切で、執筆者はつねに学術論文の原点に帰り、発表においてはできるだけ厳しい学問的良心を貫ぬき、学外の専門研究者の批判をたえず意識することが必要だとも述べています。

『人文論叢』に掲載された論文が、夫々の分野での年間優秀論文抄録集に掲

載されたり、他の研究者の論文に何度も引用されている事例は中村氏の戒め肝に銘じて精進している証拠と考えてよいでしょう。

私が入会した頃は『人文論叢』の発行だけであった。しかしその内に学会としての活動が始まり歓迎会、送別会、講演会、合評会など順次行われるようになり会員相互の関係も密になりました。その間お世話になった会員は、今はもう故人となられた、中村茂夫、禿氏好文、芝蒸、今津晃、佐々木倫生、瓜生津隆真、中川淳、酒井吏、長安章俊等諸先生方であった。

学界として盛り上りを見せたのは昭和49年4月に人文・社会学会と改称した頃から約20年間で、平成12年4月には現代社会学部ができるなど学内に大幅な組織替えが行われた。『人文論叢』の母体はほぼ外国語分野だけが残った。大学の変革という大きなうねりを感じる次第である。

キーワード

look back